

動詞「出す」と韓国語「내다」(naida)の対照研究

——認知意味論の観点から——

白 以 然*

A Cognitive Semantics approach to Japanese *dasu* and Korean *naida*

BAEK Yiyun

abstract

According to *Daijirin* Dictionary, *dasu* is a basic Japanese verb that has 28 different meanings. This poly-semantic verb represents 'put out', 'send', 'submit', 'publish', 'produce' and 'start', etc. This paper explains semantic structure of *dasu* by cognitive semantic approach, especially image schema, and compares it with that of its Korean counterpart *naida*.

This paper identifies the common elements and differences between the two verbs. As the common elements; (1) both verbs mean 'move out' prototypically; (2) the prototypical meaning extends to more abstract concepts and social domains via container image schema; and (3) both verbs represent aspect as compound verb suffix by semantic bleaching. However, there are also differences. (1) *naida* has more strong meaning of movement from the area of subject to outside and has broad meaning potential in abstract domain. (2) As suffix, *naida* represents accomplishment while *dasu* beginning because *naida* takes inner view point while *dasu* outer view point. These differences might be related to those of the original meaning potential of the two verbs and syntax difference in Japanese and Korean.

Keywords: *dasu*, *naida*, poly-semantic, image schema, compound verb

1. はじめに

動詞「出す」は、『大辞林』(第2版)によれば28項目にも及ぶ意味を持つ多義語である。その内容をみると「中に入ったものを外へ、または、人に見える所に移す」「お金を支払う」「世の中に発表する」など、一見関連性を見出しにくそうな項目が並べてある。また、「出す」は動詞の連用形に接続して「複合動詞」を作ることもしできる。姫野(1999)によると、複合動詞「～出す」には①移動、②顕在化、③開始の3つの意味が存在し、①と②は語彙的複合動詞、③は統語的複合動詞として分類される。こうしたことから、「出す」は本動詞と複合動詞に渡って、多彩な意味と機能を持つ動詞といえよう。

そもそも多義語の習得は第2言語の学習者において難しいとされてきた。田中(1990:2)は「多義度の高い語ほど、その意味の構造を捉えるのが困難である」と述べている。「出す」も広い意味範囲を持つ動詞で、意味全体を把握し、適切に使い切るようになるのも難しいし、母語訳での提示も限界があると思われる。本稿は、「出す」の本動詞と複合動詞の多彩な意味間の繋がりを体系的に説明しながら、韓国語の対応語「내다(naida)」

キーワード：出す、내다(naida)、多義語、イメージ・スキーマ、複合動詞

*平成17年度生 国際日本学専攻

と比較して、特に韓国語を母語とする学習者にわかりやすい意味提示の方法を探るための基礎を作ることを目的とする。

2. 先行研究と本研究の枠組み

「出す」および複合動詞「～出す」と韓国語の対応語である「내다」と「～내다」を比較した研究には李(1996)がある。李は、両語が「外への移動」という基本的な意味を共通に持ちながら、複合動詞「～出す」には「開始」の意味が、「～내다」には「完遂」の意味があると述べる。また、「～出す」に比べ、「～내다」のほうが心的で抽象的な移動によく使われるとしている。しかし、李は両語の様々な意味とその差を羅列することに止まっており、ずれの原因についての記述も曖昧である。

本稿では、多義語である日韓の両語を分析するに当たって、意味間の繋がりと言語全体の構造を明らかにする。また、似ている部分とずれがある部分を分析し、その要因を探る。

ここで、語の分析の枠組みとして採用するのが認知意味論の手法である。認知意味論では1つの語が持つ多義を、中心義であるプロトタイプからの拡張としてとらえ、その繋りを体系的に説明しようとする。こうした中心からの意味の拡張における動機付けは主にメタファー(比喩)、メトニミー(換喩)、シネクドキー(提喩)、イメージ・スキーマ変換によって説明できる¹。このうち、「出す」の意味拡張は、イメージ・スキーマ変換で説明できるところが多くあると思われるので、ここで簡単に説明する。

イメージ・スキーマとは、「概念構造の形成に先行し、日々の具体的な経験の中で繰り返し現れるパターン、形」(松本;101)を指す。即ち、日常の経験から得られた具体的なイメージが抽象化して1つの概念を形成し、様々な領域にも使われるようになることである。例えば、英語の「in」は、そもそも(a)のように1つの物理的な空間の中にある状態を表す。

(a)He is in a living room. (b)He is in a great team. (c)He is in a good mood.

具体的な空間の中に何かが置かれていることを表す「in」は普段の生活でよく見かけることで、これが繰り返され、「in」のイメージを形成し、(b)のように具体的な場所ではない社会的な空間の中にいる状態も「in」で表現するようになる。これが(c)になるとさらに抽象化され、目では境界が観察できない心理的空間の中にいる状態へと変換する。このようにイメージ・スキーマ変換は人間が自分の身体、または、普段観察、体験する空間的なイメージを、他の領域に写像することである。上記の「in」は、ある区切れた空間即ち、1つの容器とその内容物の関係を表しているので「容器のイメージ・スキーマ」²というが、本稿で扱う「出す」も、ある物を1つの「容器」から外へ移すという意味が抽象化され、様々な領域に適用される、一種の「容器のイメージ・スキーマ」変換で分析できるとと思われる。

では、イメージ・スキーマ変換を用い、「出す」と複合動詞「～出す」の意味がどのように拡張しているか、そして、その過程が韓国語の対応語とどのように違うかを探ってみる。研究課題としては次の3点を挙げる。

- ①認知言語学のアプローチで、本動詞「出す」および複合動詞「～出す」の多義間の繋がりと言語展開を明らかにする。
- ②同様に、韓国語の対応語「내다」と複合動詞「～내다」の意味構造を明らかにする。
- ③両語の意味展開の差とその要因を探る。

3. 本動詞「出す」と「내다」の意味

3.1 「出す」

本動詞「出す」は多義語で、次のように様々な場面に使われる。()は「出す」の意味を示す。

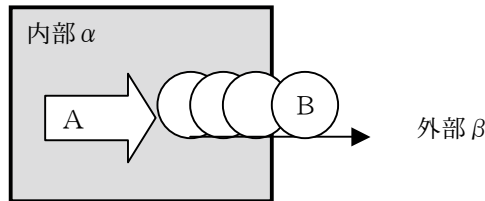
- (1)かばんから書類を出す。
- (2)お金を出す。(支払う)
- (3)娘を嫁に出す。(行かせる)
- (4)右手を出す。(伸ばす)

- (5) いい雰囲気を出す。(表す・表出する)
- (6) アルバムを出す。(発表する)
- (7) 火事を出す。(発生させる)

このように「出す」は多彩な意味を持っているが、そのうち基本義は、単純に物の外部への移動を表しており、他の言葉には言い換えできない(1)であると考えるのが自然であろう。(2)～(7)の意味は(1)からの拡張によるものであると考えられる。従って、「出す」の基本義(プロトタイプ)を次のように想定することができるであろう。

(1)基本義：<物理的な力で><物を><内部から><外部の空間に><移す>

この基本義を上記の「かばんから書類を出す。」に適用してみると、「物理的な力」は書類を取り出す具体的な力、「物」は書類、「内部」はかばんの中、「外部の空間」はかばんの外になる。これを図に表すと<図1>のようである。



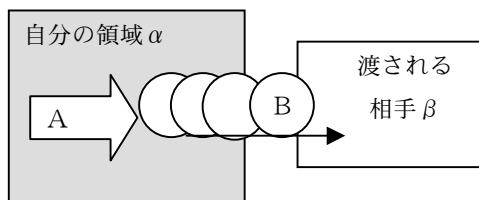
<図1>

ここで動因Aは物理的な力、Bは具体的な物、細い矢印はBの移動経路、αは内部、βは外部空間で、目で観察できる区切りで分けられている実際の場所である。αからβへの移動は物理的、客観的な事実で、視点はα・βどちらにも置かれる。基本義には次のような例がある。

- (1a) ゴミは指定された場所に出してください。(1b) 冷蔵庫からビールを出して一気に飲んだ。
- (1c) 看板を表に出す。

(1a)を見ると、ゴミは対象B、αは家の中、βは外の「指定された場所」である。物理的な力Aは省略されることが多いが、Bを移す力が想定されている。このプロトタイプイメージ・スキーマが様々な領域に拡張され、以下のような多義を派生させると考える。

(2)<物理的な力で><物を><手元から><資格のある人・しかるべき所に><移す>

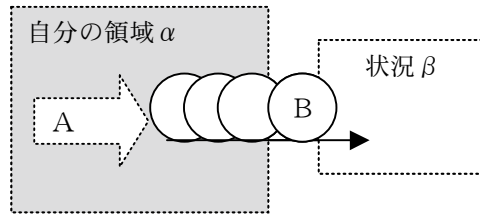


<図2>

- (2a) 区役所に離婚届を出した。(2b) 先生に年賀状を出す。(2c) お客様にこの料理を出してください。
- (2d) 会社設立の資金を出す。

これは「提出する」「支払う」「送る」などに言い換えられる表現であるが、いずれも視点が空間αに置かれ、自分の手元αにあったBをしかるべき相手βに渡すという意味になる。動因AとBの移動は具体的で物理的なものであるが、空間αとβは(1)のように目に見える境界があるというより、自分に近いところ、遠いところとして区別でき、本来の所有主と新たな所有主という所有のドメイン間の移動となる。

(3)<心理的な力で><対象を><自分の領域から><違う状況に><移す>

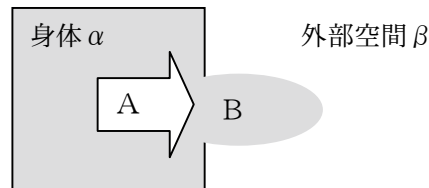


<図 3>

(3a)娘を嫁に出す。(3b)愛車を修理に出す。(3c)マンションを賃貸に出す。

(2)がさらに抽象化された意味で、空間 α は動因Aに物理的、心理的に近いところで、 β は遠いところである。Aは物理的な力ではない心理的な力となり、 α と β は目で観察できる区切りをなしていないうえ、 β が抽象的な空間である。Bの「移動」の意味も抽象化し、(3c)のように実際の移動がまったくないこともある。

(4) <物理的な力で> <身体の一部を> <元の位置から> <外部に向かって> <伸ばす>



<図 4>

(4a)舌を出して挑発する。(4b)左手を出してください。

<図 1>で物Bが外部へ移動する際描く軌跡が拡張し、<図 4>のように身体の一部が外部に向けて伸張することを表すようになる。 α は容器というより身体で、移動の対象Bと一体化しているが、内部から外部への具体的な動きが存在する。

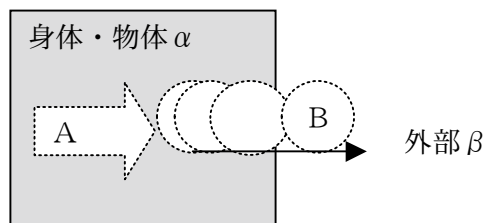
このような身体表現はさらなる拡張を経て、慣用的な表現に多く使われている。代表的なものには「～に手を出す」がある。これは、①(人)に暴力を振舞う、②(良くないこと)に関る、という意味として使われる。①の場合、「～に(触れるように)手を伸ばす」という一般的な行動から「暴力」を表しているので、シネクドキー³、②は手を出して触れることでそれに「関る」後続動作を表しているので、時間的な隣接性に基づいたメトニミー⁴といえる。また、「他人の人生に口を出す」のような表現は、言葉を発する機関である「口」を通じて「割り込んで意見を話す」という意味を表わしているのでメトニミーによる拡張である。

一方、このような身体に関する表現は、実際の動きが背景化され、「目立つようにする、露出させる」点を焦点化する例もある。

(4c)歯茎を出して笑う。(4d)涙・汗を出す。

(4c)は具体的な体の一部の動きに関する表現であるが、実際に動かされるものはなく、体の一部をそのまま露わにする動作である。(4d)の場合、体の一部の物理的な伸びではなく、体の中から何かを分泌することである。これらは身体の中に潜んでいたものを外に露出させるという意味では下の(5)とも関連がある。

(5) <気持ち・雰囲気などを> <身体・物体の中から> <外部に> <露わにする>

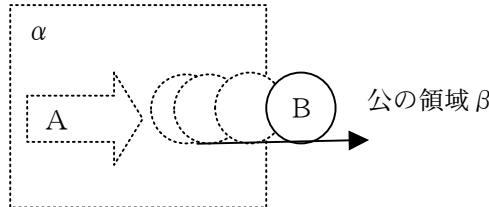


<図 5>

- (5a)勇気・やる気・本気・元気を出す。(5b)子供が熱を出している。(5c)彼女はすぐに感情を顔に出す。
 (5d)ピアノがいい音を出す。

身体の中に秘めてあったものを表に出すことで、(4)が物理的な領域から心理的な領域に写像した意味である。(4)では具体的な動きがあり、それが目で観察できたが、ここでの対象Bは、気持ちなどの精神作用か、熱・雰囲気・味・音など、目に見えないものである。これ以下の意味は、動因Aと対象Bの移動がほとんど背景化され、「外部への露出」という意味が強調される。

- (6) <対象を><個人の領域・見えない状態から><公の領域に><表す、発表する>



<図 6>

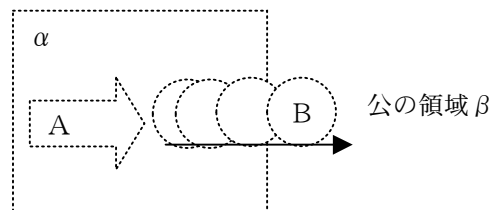
- (6a)ネットで実名を出すことは危険である。(6b)新聞・テレビに広告を出す。(6c)同人誌・新製品・CDを出す。
 (6d)駅前に店を出す。

これらは、何かを公の場に露出させる、発表するという意味で、(5)が身体ではない、より社会的な領域に拡張したものである。 α は何かが見えてない、人の目に見えない状態で、 β は人に見えるように露わになった状態である。物理的な移動の意味合いはほとんどなくなり、空間 α と動因Aは背景化され、何かを姿を現すことを意味するようになる。

- (6e)展覧会に絵を出す。

(6e)は実際に具体的な物である絵を自分の手元からしかるべき場所である展覧会場に移すことなので(2)の意味もあるが、展覧会のように人目に晒す公の場に絵を発表することからは(6)ともいえる、両者の中間に位置する意味である。

- (7) <新しい事態を><存在しなかった状態から><存在する状態に><(創出)する>

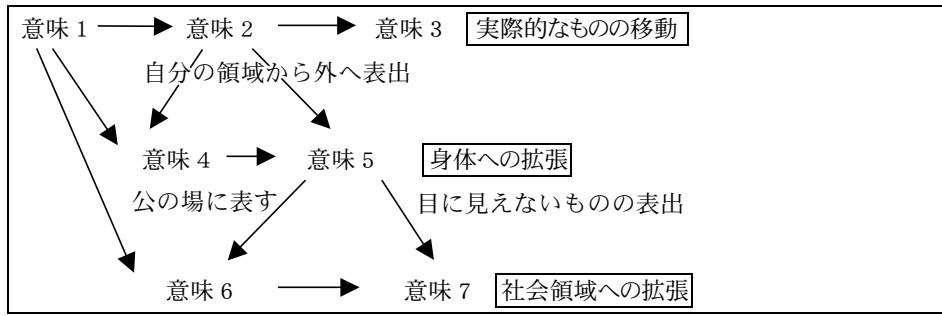


<図 7>

- (7a)30万円の利益を出した。(7b)新社会人として成果を出す。(7c)ベストスコアを出す。(7d)火事を出す。

(6)からさらに抽象化が進んで、動因Aと空間 α は完全に背景化する。対象Bも目に見えるものではなく、抽象的な領域で起こること、または事態である。空間 α から β への「移動」の意味は、無から有への変化となり、なかった事態の発生、始まりという意味になることである。

以上(1)から(7)で述べた通り、「出す」の意味は具体的な移動を表すプロトタイプが抽象化されながら拡張していく。全体の意味としては「ある力Aで対象Bを内部 α から外部 β に移す」と定義できるが、動因Aは次第に背景化していき、Bは具体的な物から抽象的な物へと拡張されていく。 α は実際の内部空間が自分の手の届くところ、公の目に見えない状態に、 β は外部空間が自分から遠いところ・公の場に変化していく。7つの意味をネットワークにすると<図8>の通りである。



<図 8 「出す」のネットワーク>

3.2 「내다」

韓国語の「내다」も「出す」と同じく、「ある力Aで対象Bを内部空間 α から外部空間 β に移す」意味を持つ言葉で、これが、イメージ・スキーマ変換を介して、抽象的な領域へと拡張される。「出す」と同様に意味を並べてみると次のようになる。

- (1) <物理的な力で> <物を> <内部から> <外部の空間に> <移す>
 - (1a) 냉장고에서 반찬을 내다. (冷蔵庫からおかずを出す)
- (2) <物理的な力で> <物を> <手元から> <資格のある人・しかるべき所に> <移す>
 - (2a) 선생님께 숙제・레포트를 내다. (先生に宿題・レポートを出す)
 - (2b) 손님에게 차를 내다. (お客さんにお茶を出す) (2c) 돈을 내다. (お金を出す)
- (3) 韓国語には例が見当たらない。
- (4) <物理的な力で> <身体の一部を> <元の位置から> <外部に向かって> <伸ばす>
 - (4a) 혀를 내 보세요. (舌を出してみてください) (4b) 주먹을 내다. ([じゃんけん]で)ゲーを出す)
- (5) <気持ち・雰囲気などを> <身体・物体の中から> <外部に> <露わにする>
 - (5a) 용기・화・욕심・겁・흥내를 내다. (勇氣・怒り・欲・臆病・まねを出す)
 - (5b) 시끄러운 소리를 내다. (うるさい音を出す)

ここまでは、「出す」の(3)「違う状況に移す」がないこと以外、両語が似ているように見える。しかし、韓国語の場合、「出す」とは異なり(1)「具体的な移動」を「내다」で表す例は少ない。物を外に出すときは一般的に「꺼내다(取り出す)」「내놓다(出して置く)」などを使う⁵⁾。(4)「体を伸ばす」も主に「내밀다(出して押す、押し出す)」のような複合語で表現するのが普通である。即ち、具体的な物の移動、または身体の実際の移動を表せないわけではないが、そのときは、他の要素と結合し、意味を補うのが一般的である。こうしたことから、むしろ制約のない(2)「自分の領域から外部に移す」が「내다」のプロトタイプであると考えたほうが妥当であろう。

また、感情などの露出である(5)の場合、「出す」に比べ用法が豊かである。(5a)は「出す」と同様に、身体から気持ちなどの表れを意味するが、「まね」「怒り」「臆病の気持ち」などの表出まで表現でき、より幅広く使われる。

- (6) <対象を> <個人の領域・見えない状態から> <公の領域に> <表す、発表する>
 - (6a) 신문에 광고를 내다. (新聞に広告を出す) (6b) 책・앨범을 내다. (本・アルバムを出す)
 - (6c) 새 가게를 내다. (新しい店を出す)
- (7) <新しい事態を> <存在しなかった状態から> <存在する状態に> <(創出)する>
 - (7a) 성과・신기록・통계・결론을 내다. (成果・新記録・統計・結論を出す)
 - (7b) 불・교통사고를 내다. (火事・交通事故を出す) (7c) 부도를 내다. (不渡りを起こす)

(6)と(7)は日本語とほとんど同じで、何かを公の場に発表することから発生へと拡張される。

- (8) <空間・時間を> <存在しなかった状態から> <存在する状態に> <(やりくり)する>
 - (8a) 산지에 길을 내다. (山に道を作る) (8b) 전세를 내다. (貸切をする)
 - (8c) 휴가・시간을 내다. (休暇をもらう、時間をやりくりする)

これらは、日本語では使われない用法であるが、なかった事態の出現、創出ということから(7)と関連する表現である。空間の場合、(6c)に「店を出す」のような例があるので、「길을 내다(道を出す)」という表現への

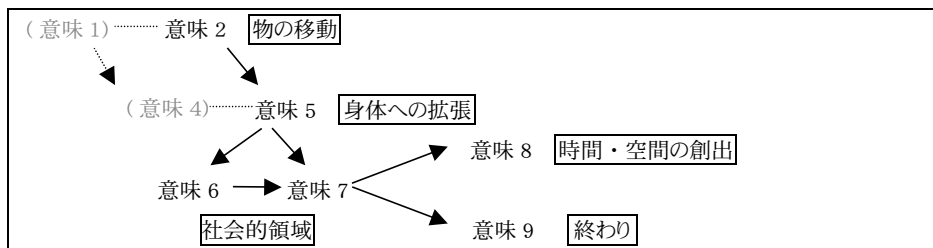
展開は自然であろう。ここから、何か新しい空間をやりくりすることへ発展したと思われる。また、空間にとどまらず、(8c)のような時間のやりくりにも「내다」は使われる。

(9) <対象を> <普段の状態から> <使えない・終わりとなる事態に> <する>

(9a) 끝·결판을 내다. (終わりにする・決着をつける)

(9b) 흠·구멍·고장을 내다. (傷をつける・穴を開ける・故障させる) (9c) 막살을 내다. (粉々にする)

(7a)に「결론을 내다(結論を出す)」があるが、(9a)は、そこからさらに拡張し、「終わりにする」「決着をつける」という意味にまで使われている。これは元の状態(α、容器)から出たことによって、もはや空間αとは関りがなくなった、その状態が終わったという意味になったと思われる。(9b)も(7b・c)の延長と考えられる表現であるが、何か事故を引き起こしたことから、物に傷をつけたり、穴を開けたりすることへと意味が拡張されている。これが(9c)になると、粉々にして、もう「使い物」ではなくなったことになる。いずれも、元来の状態に終わりを告げる表現である。以上見てきた「내다」の意味を整理すれば<図9>のようになると思われる。



<図9 「내다」のネットワーク>

3.3 本動詞「出す」と「내다」の比較と考察

以上のように、両語は対応語で、「外への移動」という意味が、「出現・創出」まで拡張され、実際の移動が背景化されていく共通点をもっている。しかし、両語の意味の領域には差もあった。簡単にまとめると<表1>のようである。

<表1 「出す」と「내다」>

	A	B	空間 α	空間 β	出す	내다
(1)	物理的な力	物	内部	外部	●	△
(2)	物理的な力	物	自分の手元	しかるべき所	○	●
(3)	心理的な力	対象	自分の領域	違う状況	○	×
(4)	物理的な力	身体	元の位置	外部	○	△
(5)		気持ち	身体の中	外部	○	○
(6)	移動を働きかけ	対象	見えない状態	公の領域	○	○
(7)	る力は背景化す	事件等	ない状態	ある状態	○	○
(8)	る	時・空	ない状態	ある状態	×	○
(9)		対象	普段の状態	終わりとなる状態	×	○

(●：プロトタイプ、○：ある、×：ない、△：あるが限定的)

「出す」を見ると、最も具体的で客観的な物事の描写である(1)がプロトタイプで、その意味が抽象化されながら(7)まで拡張される。これに対し「내다」は、(1)には制限があるので、視点が中に置かれる(2)がプロトタイプとして挙げられることは上述した通りである。また、「내다」の(5)は「出す」より多彩な感情の表現に使われ、「出す」では使われなかった(8)、(9)まで意味の拡張が行われる。「내다」は、自分の領域から何かを出すことをプロトタイプとして持ち、より心理的・抽象的な領域に多く使われると思われる。

実際母語話者がどのような文に「出す」または「내다」をよく使っているかを調べるために「出す」と「내다」

で普段使いそうな文を自由に書いてもらう小実験を行った。韓国語母語話者63名に調査した結果、具体的な移動を表す(1)に当たる文を書いた人は3名に過ぎなかった。産出した文も全員「(冷蔵庫から) おかずを出す」で、使い方が限定されていることが覗える。もっとも多かったのは「돈을 내다 (お金を出す)」で29名、その次が「숙제・보고서・레포트・서류를 내다 (宿題・報告書・レポート・書類を出す)」と「화・짜증을 내다 (怒り・苛立ちを噴出する)」で同じく20名ずつであった(重複あり)。自分の領域から何かを出す(2)が圧倒的に多く、その次が感情の噴出である(5)だったのである。

これに対して、日本語母語話者36名に「出す」の入った文を書かせた結果、「ダンスから服を出す」「ごみを出す」など(1)の意味を書いた人が24名、「手紙・宿題・書類・お金を出す」が21名、「元気・本気・力を出す」が17名の順であった(重複あり)。

こうしたことから、韓国語母語話者が持っている心理的プロトタイプは「自分の領域からものを出す」でそれが感情の表出、物の産出へ発展しながら、「出す」より抽象的な領域へと拡張されたと思われる。また、「내다」は、元の領域から完全に出ること、「終わり」という事態にまで意味が拡張される。「내다」は「出す」より主観的で、主として抽象的、心理的な領域で用いられる表現であるといえそうである。

4. 複合動詞「～出す」と「～내다」

「出す」と「내다」は他の動詞を前項動詞として取り、複合動詞が作られることも共通している。この章では、両動詞の複合動詞としての意味展開を考察し、その共通点と相違点を述べる。

4.1 複合動詞「～出す」

姫野(1999)は複合動詞「～出す」の意味を<表2>のように大きく3つに分けて整理する。本稿もこれを参考に考察を行う。

<表2 姫野(1999)の意味分類>

①移動	外部、前面、表面への移動	追い出す、運び出す、引き出す、投げ出す、取り出す、飛び出す
②顕在化	隠れていたものが覆いを取り除かれて姿を現す、無から有が生み出される。	顕現; 磨き出す、思い出す、書き出す
		創出; 考え出す、作り出す、描き出す、染め出す
		発見; 聞き出す、探し出す、洗い出す
③開始	開始のAspect	今にも雨が降り出しそうだ。等

この3つの意味も本動詞と同じく<図1>のイメージ・スキーマ変換によるものである。①から②への拡張は前述した本動詞とそれほど変わりはないと思われる。

①「移動」は、前項動詞(以下V1)として「追う」「運ぶ」「投げる」など、移動動詞を取ることが多い。前項動詞で移動の方法を表し、後項動詞(以下V2)である「～出す」で外への方向性を示す。それで、「運び出す」「投げ出す」などの例からわかるように、大体V1(運ぶ・投げる)という動作を経て結果として外の方向に移すという意味、すなわち「V1して外のほうへ出す」ということになる。

このとき「移動」の「～出す」は、本動詞(1)～(2)の移動と同様に具体的で実体のある物に力を加え、外へ移動させるという意味で、具体的な物、場所、物理的な力が存在する。

複合動詞の2番目の意味「顕在化」は本動詞(5)～(7)の用法を複合動詞として使うもので、「外への移動」という具体的で物理的な動作をイメージ・スキーマ変換によって抽象的、心理的な動きに適用したものである。具体的なものの移動や力はないが、顕在化された物は具体的な物である場合もある。

まず、「顕現」と「発見」は本動詞の(5)のように、もともと中に秘められていたものが表に露出され、人の目の届くところ、公の場に晒されることである。反面、「作り出す」「描き出す」などの「創出」は(7)のように新しいものまたは、事態が生じることを表す。

この「創出」の意味がさらに抽象化したのが「③開始」である。内部空間 α と一定の努力（動因A）が、「創出」よりさらに背景化され、新しい事態の発生だけが焦点化され、開始の意味になったものである。（図10参照）

複合動詞「V1+V2」の後項は、その動詞の単独動詞用法に比べて「抽象化し、接辞化することがよくある」（斉藤、1985）といわれる。V2「～出す」も本動詞の意味(7)からさらに漂白化し⁶、ものの始まりを表すアスペクト的な用法として、接辞のような役割を担当するようになる。こうしたことから、移動と顕在化の場合、結合されるV1が大体決まっており、1つの語彙としての性格の強い「語彙的複合動詞」であるのに対し、アスペクトの「～出す」は制約を受けにくく、多くの動詞に自由に接続できる「統語的複合動詞」として分類される。

4.2 複合動詞「～내다」

「～내다」も「～出す」と同じく、複合動詞のV2として使われ、移動から顕在化を経てアスペクトへと意味が拡張される。その意味の変化を3つに分けて述べると次のようである。

(1) 具体的な移動

(1a) 사랑니를 뽑아내다. (親知らずを抜き出す)

(1b) 방안의 가구를 전부 들어내다. (部屋の中の家具を全部取り出す)

本動詞として具体的な移動にはあまり使われないと述べたが、このように他の移動動詞をV1として取ることによって、具体的なものの移動を表す表現となる。「～出す」と同様に、V1して外のほうへ「出す」という意味である。

(2) 顕在化

(2a) 생활에서 미술을 찾아내다. (日常生活でアートを探し出す) [発見]

(2b) 옛 일을 기억해내다. (昔のことを思い出す) [顕現]

(2c) 젊음의 열정과 개성을 그려내다. (若さの熱情と個性を描き出す) [創出]

(2d) 팀원이 합심해서 좋은 결과를 만들어내다. (チームが心を合わせ、いい結果を作り出す) [創出]

内部から何かを出すことから、顕在化の意味に拡張されるのは「～出す」とあまり変わらない。しかし、「～내다」の3番目の段階のアスペクトは「開始」の「～出す」とは反対とも言える「完遂」である。

(3) 完遂

(3a) 암을 이겨내다. (癌に勝ち抜く)

(3b) 끝까지 버텼다. (最後まで耐え抜いた)

(3c) 오랜 연구 끝에 겨우 알아냈다. (長い研究の末、かろうじて究明した・究明し出した)

外への「移動」が、何かの作業の結果、新しい事態が成立する「顕在化」となり、そこから、元の領域から出る、動作が終わることを表す「完遂」になることである。(3c)の場合は「発見」と「完遂」の中間に位置する用法といえる。

4.3 複合動詞「～出す」と「～내다」の比較と考察

両語共に、V2として使われながら、具体的な移動の意味がアスペクトへと文法化する。アスペクト的用法は、他の意味に比べ生産性が高く、接辞のような性格が強くなった「統語的複合動詞」であることも共通している。しかし、空間から時間の概念への拡張は共通しながら、その発展の方向は異なっていた。

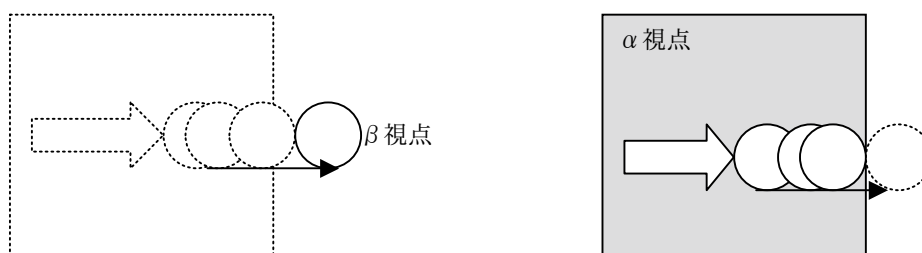
「～出す」が「創出」の意味で使われるときは、ある過程の結果、新しいものが出現したという意味になるので、「完成」と「発生」の2つの事態が重なる接点にある事態であるといえる。「考え出す」「作り出す」などは、1つの事態(考える・作る)が終わり、その結果、新しい事態が出現した、という意味である。即ち「完遂」と「開始」の接点にある用法で、田辺(1983)は創出の「～出す」は「動作の完了を表す「～上げる」と共通のものが多く」と述べている。これは韓国語の「～내다」も同じで、単純化して言うなら、創出は両語ともに「完遂」と「開始」の含みを持っている。

しかし、両語を比較してみると、移動と顕在化の意味であっても、「～出す」は新しい物事の出現、「～내다」は「完遂」の意味合いを持っていることが多い。例えば、「作り出す」は何かを作られ「出現する」ことに焦点があるが、対応語である「만들어내다」は、完遂したという含みをより強く持って「作り上げる」に近い。また、

日本語の「洗い出す」は何か隠れていた事実を露出、出現させる、顕にするという意味で使われるが、それを直訳した韓国語の「씻어내다」は汚れなどを無くす、水で洗って自分の領域から外のほうに出すという意味である。

3番目の意味である「アスペクト」になるとこれがもっと進んで、「～出す」は何かの現れから「開始」が、「～내다」は何かを自分の領域から追い出す「完遂」が焦点化されることである。

このような差は基本的に同一の現象を異なった心的視点から眺めているから、言い換えれば、心的視点の相違から起こる問題だと思われる。同じ現象が視点の位置によって、反対の意味になることは日常の言語生活でも一般的に観察される。例えば同じ坂を「どこから見ているか」によって「上り坂」とも「下り坂」とも言える。「開始」と「完遂」という両語の差も、基本的に同様の現象を異なった心的視点から眺めているから起こることだと思われる。もし、外部から「外への移動」を眺めるなら、その移動によってなかった事態が発生(開始)したと把握できる。一方、何かが外に移動することを中側から眺めるなら、ある事態が自分の領域から除去される、「完遂」「終わり」になる。



<図10「開始」と「完遂」のイメージ・スキーマ>

「～出す」の場合、視点が空間βに置かれ、空間αと力Aは背景化され、事態の出現が焦点化される。これに対して、「～내다」は、視点が空間αに置かれ、主体の領域から出て行くことが焦点化される。

今井(1993)は、「～出す」がこのように外側の視点を取るので、単なる事件の開始を表す「～始める」と違って「話者の視点から見て知覚可能な形で事態の生起」という意味を持ち、「話者は命題が表現する事態を知覚するだけであり、事態に対する制御力を持っていない」という。それ故、姫野(1999)が述べたように開始の「～出す」は意志的表現(命令、使役など)の文脈には現れにくく、寺村(1984)のように『『始める』よりも突然、だしぬけに、といった感じが強い』と思われる。

これに対し、完遂の「～내다」は、自分の気持ち、長い時間を伴う努力を表す言葉と一緒に使われる傾向がある。「내다」は本動詞の用法でも「自分から何かを出す」意味がプロトタイプであり、「内面からの噴出」の意味が豊富であった。また、抽象的な領域への拡張も「出す」より広く、「終わりにする」という意味まで拡張が行われていた。V2としての両語の差はこうした本動詞の意味の差から起因すると思われる。

5. おわりに

以上のように、日本語の「出す」及び韓国語の「내다」の意味を記述、比較してみた。共通点としては、両語は外部への移動がイメージ・スキーマ変換によって様々な領域へと拡張されること、また複合動詞の後項として使われながら、さらに文法化され、「移動」の意味は漂白化し、アスペクトの意味に展開されることが挙げられる。

しかし、その過程は随分と違いが見られた。本動詞「내다」は「出す」に比べ、「自分の領域から何かを出す」こと、抽象的な領域により多く使われる傾向があり、両語のプロトタイプも異なっていた。また、こうした差はV2のアスペクトとしての差にも反映され、「～出す」は外部の視点を取る「開始」、「～내다」は内部の視点を取る、より心理的な含みの「完遂」の意味になっていることもわかった。

今回はこのように認知意味論の観点から両語を比較してみたが、アスペクトの意味への異なる拡張には両言語の複合動詞の統語的な構成の差も関わっていると思われる。日本語の場合、複合動詞のV1とV2の統語関係は多様で、「～出す」の場合も、移動の「取り出す」、顕在化の「描き出す」は、「何かを取って(それを外に)出す」、「描いて出す(目に見えるように表す)」でV1とV2が順次的な関係であるが、統語的な複合動詞である「急に踊

り出す」だと「踊ることを出す（踊る動作を公の場に出す、即ち始める）」ことになる。これに対して、韓国語の場合、複合動詞のほとんどが「V1してV2する」として順次的に解釈でき⁷、日本語のような様々な統語構造の複合動詞を作ることはできない。日本語のように「開始」のアスペクトとして使われないのは、すべての「~내다」は「V1して出す」という意味になるからであると考えられる。即ち、アスペクトに拡張されても意味構造には変わりがないので、「V1して(主体の領域から)出す」、「やり遂げる」、「完遂」の意味になるしかなかったと思われる。今後はこうした差も顧慮に入れ、意味論的、統語論的な総合的な考察をしていきたいと思う。

注

- 1 詳しくはLakoff (1987)、松本 (2003) などを参照
- 2 その他イメージ・スキーマには「上下のスキーマ」「前後のスキーマ」「部分・全体のスキーマ」などがある。
- 3 上位概念で下位のものを、または下位で上位を指すこと。「花見」は上位の「花」で下位の「桜」を表す例で、「下駄箱」は履物の一種である下位の「下駄」で履物全般（上位）を表す例といえる。
- 4 より認知しやすい隣接しているもの、もっと目立つもので対象を指すこと。「漱石を読む」のように、「人」で「彼が書いた本」を表したり、「手が足りない」のように「手」で「人」または「労働力」を指すことである。
- 5 一方、自動詞「出る」に当たる韓国語である「나다」も、何かができる、発生する（火事、事故、病気など、「불이 나다」「병이 나다」）ことに使われることが多く、ほとんどの実際の移動は、「나가다（出て行く）」「나오다（出てくる）」で「가다（行く）」「오다（来る）」との複合形で使われる。これは「入る」「上がる」「下がる」など韓国語の移動動詞において普遍的に見られる現象である。
- 6 Bleaching：動詞・名詞などの内容語が文法化しながら、本来の意味が一般化・抽象化していく意味変化（辻、p.46）
- 7 森下（p31～35）に韓国語の複合動詞が分類されているが、殆どが日本語の「～て」で解釈されている。両言語の差として「着替える」の韓国語が「갈아입다」（替える+着る）になることを指摘するが、「着物を「替えて着る」という見方をすれば、順序が逆になっていない」と述べる。ここから、韓国語の複合動詞は「V1してV2する」といった「順時的」な構造をしていることがわかる。

<参考文献>

- 李 暉洙 1996 「日韓両語における複合動詞「-出す」と「-내다」の対照研究－本動詞との関連を中心に－」『日本語教育』89 pp.76-87
- 今井 忍 1993 「複合動詞後項の多義性に対する認知的意味論によるアプローチ－「～出す」の起動の意味を中心に－」『言語学研究』12 pp.1-24 京都大学語学研究所
- 斎藤倫明 1985 「複合動詞後項の接詞化－『返す』の場合を対象にして－」『国語学』140 pp.120-132
- 田中聡子 1996 「動詞「みる」の多義構造」『言語研究』110 pp.120-142
- 田中茂範 1990 『認知意味論－英語動詞の多義の構造－』三友社出版
- 田辺和子 1983 「複合動詞の意味と構成：「～ダス」・「～アゲル」を中心に」『日本語と日本文学』3 筑波大学国語国文学会 pp.40-49
- 辻 幸夫 2002 『認知言語学キーワード辞典』研究社
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 姫野昌子 1999 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 松本 曜 2003 『認知意味論』大修館書店
- 森下善一、池景来 1992 『日韓対照言語学入門』白帝社
- 山梨正明 1995 『認知文法論』ひつじ書房
- Lakoff, G. 1987 Women, fire, and dangerous things-What categories reveal about mind, the University of Chicago (『認知意味論』、1993 池上嘉彦、河上誓作 他訳 紀伊国屋書店)